

無題

鳥取県 大下 熊 蔵

昭和二十(一九四五年)八月九日早朝、佳木斯師団司令部横にソ連機爆弾投下、非常召集により全員出勤す。しばらく待ったが、何の変わりもなく、いったん朝食。終了後出てくるようにとの駅長の話により帰って来る。

一〇四列車にて陸軍病院の患者輸送のため出発。約一時間半延発。我々も歩行不能の患者さんの乗車を手伝い、ちようど昼になったので、昼食の乗車券をビュローに引渡し、後始末をして召集を待っていたところ、電話あり。警察に行く(十二時半)。午後二時半までに八五三部隊に到着せよとの召集令状を頂き、走って帰るろくろく挨拶もせず応召す。十日まで営門にて種々出勤準備をする。十一日駅の警備のため住吉分隊長と共に駅に行く。皆に会って話をする。市民引き揚げで上を下への

大騒ぎであった。

一泊して十二日朝兵營に帰り、十二日午後より野戦兵器廠に弾薬受領に行く。自動車破損のため晩までかかった。松花江埠頭に行き、憲兵隊の知人と会う。同船にて我が四中隊の連中も出発した。十三日敦化に向かい出発のため駅に行く。列車の準備できなくて一泊す。町へ行き夕食を戦友等と作り多忙であった。途中出発の由にて駅に引き返す。十四日朝より列車出発前まで分隊の荷物積み込み、非常に疲れた。

十四日夕方遅く出発す。駅長、運転主任等と別れを惜しんだ。病院の田口先生、池田君等も残った。本当にかわいそうであった。佳木斯市一帯の火の海を後にした。途中、蓮江口の駅長(矢野さん)も戦死されたよう聞いた。

湯原の近くまで行く。小さい鉄橋があり、その鉄橋にて敵の大釘抜き策により列車脱線。機関車と次の車両がぶら下がり停車。笠原少尉の指揮で一日がかりで修理す。避難民若干も我らの列車

に便乗していたので炊事等手伝う。匪賊が射撃してきたので応戦。晩まで追ったがつかまらず帰って来た。小生は昨日の疲労と夜冷えたため腹痛を起こし、列車の監視で残る。南又に着いたのは既に十六日南又駅の連中は落ち着いていた。十七日夜遅く綏化駅到着。避難民全部綏化に下車している旨にて綏化に下車と決まる。

十八日朝、雨の中を荷卸しその他苦勞して飛行場専用線にて下車。満鉄の避難列車も来ておったので大爺君その他とも会った。綏化に落ち着くと同時に終戦の報に接す。最初は信じられなかったが、哈爾濱の軍司令部より綏化の停車場司令部を通じ停戦の命令あり、落胆す。営兵勤務以外何もなく一度外出。満鉄列車に行く。時間少なく笠原少尉殿の用済ませてすぐ帰る。

二十四日武装解除。その後外出あり。出て行き渡辺助役の奥さん、大沼、原崎の奥さん等と会ってきた。渡辺さん、山野辺さん等もおった。帰りに阿部勝等の車にも立ち寄りもう一度話してきた。

武装解除後は色々使役に使われた。後日農産公社の専用線にも行つたが昨日哈爾濱に向かい出発した由、綏化の社宅の人より聞く。道路作業中、満鉄社宅の人より饅頭等もらったこともあった。

九月一日、陸軍官舎に収容された。だんだん日が短くなり、寒くなってくる。その中避難家族輸送が始まった。我々はウラジオ経由日本へ帰るという話が濃厚であった。

九月十八日朝、十五分以内の整列がかかり、駅に向かい出発するとの事。不安ながら行った。列車は準備してあり、すぐ乗車出発す。黒河の方に列車が向かい驚いたが、致し方なし。

途中は非常に停車が多く二十三日頃黒河に到着す。駅の右側にて露營約一週間。九月三十日ソ連へ入国のため黒龍江の畔に行き、船なく一晩待機する。川の畔で入浴し震えた。ロスケの兵隊が防寒外套被服等かっぱらって往生した。時計や万年筆等皆さらわれた。(綏化滞在中病院列車に津久井さんの奥さんがいたので会った)

十月一日黒龍江を船で渡りブラゴエシチェンスクに上陸。行軍にて駅に行き、駅の横で露営する。埠頭まで糧秣等運搬に二、三回往復する。夜遅くなり、ロスケのかっぱらいに遭い往生す。

夜遅くようやく落ち着いて寝た。薪物がなく付近の馬鈴薯畑の馬鈴薯の殻を集めて炊事した。一週間もいるうち、馬鈴薯の殻もなくなり一里も遠方まで集めに行つた。時々アムール河の埠頭に使用に行つた。

夜天幕を切つて背囊をかっぱらったり、雑囊をかっぱらったりされた。ひどい国である。また、夜遅くまでトラックの上で大声で合唱して帰つて来る婦人達の歌声が耳にさわつて仕方がなかった。子どもは裸に素足の子が多く、想像以上に淋しい町だった。

十月五日朝曖暉で切り離された小田少尉以下の中隊の連中到着、安心する。

奉天造兵廠の部隊、昼頃到着。すぐに乗車する。部隊長は馬上。将校は皆軍刀所持していた。その

中に五、六人の子供連れの婦人の混じっているのが見られた。

五日夜、我々もいよいよ乗車出発する事になった。連日の寒さでこりこりだったので喜んだ。日落ちていずこへ行くやら淋しい旅立ちであった。夜中二時頃、東だ西だと大騒ぎしながら、ついに汽車は西に向かい、全員淋しく眠る。皆なんとかんとか言っていたが覚悟をした様子であった。(ポチカレホ駅を過ぎた頃)

一路列車は西へ西へと二昼夜停車もせず走つた。チタの大都会を越えて初めて飯ごう炊事をした。列車が西に行くに連れて気温が下がり、炊事も楽でなかった。バイカル河畔、山は真白く雪におおわれ、故郷の深山の初雪を思わせた。列車のストーブを燃やして採暖す。

至るところの駅で女従業員達がポイント小屋とか小部屋の粘土塗りをしていた。また夜中に暗いところで飯ごう炊きをしたこともあった。

十月十三日朝、クラスノヤルスクの大都市到着。

すぐに炊きさんを始めたところ乗車命令あり、乗車す。すぐに貨物ホームに引き込み、下車命令。

十一時頃下車。駅前印刷工場の横にて四、五中隊と別れ六百人第八收容所に行く。

青木少尉殿は四、五中隊第五收容所に收容される。(途中北安にて綏化停車場司令官と西村大佐部隊長はソ連の命により下車)

町中をあちこちと引きまわされて約六キロメートルぐらい歩いて夕方三時頃ようやく收容所に到着。收容所はまだ改造中にて寝台も何もできていなかった。ここは案外暖かい感じがした。市内ではロスケ、子供、婦人皆珍しそうに我々の疲労して歩いているのを眺めておつた。見せしめのため市中をあちこちらと連れ歩いたのであるうと思つた。落ち着かぬ、知らぬ他国の黄昏は、歌の文句じゃないけれど泣きたいくらいであった。でもロスケの我々に対する感情は想像の外であった。非常に好感をもつて接してくれたが、それも分からぬ。我々はなんだか戦に敗れ、ののしられてい

るような感じもした。

宿舎に入つてガラス越しに見るロスケの少女達、歌を歌つて合図するようだけど何も分からぬ。

我々はただ漠然と見とれているのみであった。そして十四、十五日は宮内の越冬準備作業。便所を掘つたり、寝台を造つたりした。(上下二段)

到着してから、いつ帰れるだろう、来年の一月は帰れるだろう、あるいは十二月に帰れるだろうと泣いたり笑つたり連発であった。

二週間ほどしていよいよ作業は始まつた。製材所、テンドアー駅の炭殻捨て等寒さとともに作業は激しくなつてきた。あるときはニンジン二本もらつて石炭の貨車卸しに行つたこともあった。糧食の少ないのと焼き方の変つた変なパンですっかり皆弱つてしまった。

夕方になると暗い部屋で、ああ、いつ帰れるかな、きついなあーと皆言つて暮らした。

行つた時からしばらくは粟や高粱のお粥を食べさせられたが、それがなくなり高粱の原穀をその

まま煮て食べさせられた。それでも空腹のためおいしいおいしいと言って食べた。

正月前になって小麦の原穀を食べさせられたのでこれで助かったと皆喜んだ。一粒の不消化もないよう、皆暗い部屋で一時間もかかって食事をした。

その頃はもう託児所（デテヤスリ）の工事で寒くなり、根掘り等して、バラス運搬、モルタル運搬など一番つらかった。ソ連の労務中尉が回って来てダワイ、ダワイと言って仕事をさせた。

ある時は託児所から駅に煉瓦の貨物卸しに行き、暗くなるまでダワイ、ダワイで防寒大手袋も一日で破れ子供等に飯ごうをかつぱらわれたりして一時一日を送った。

託児所での昼食は鉄道クラブの広場に行つてした。

当時ここでも洪下、加来さんの指揮する我々の同僚が働いていた。皆員数外の品物や時計を持ったりした者は物々交換をして煙草、パンを手に入

れ楽しんでいたが、我々は何もなく煙草も吸うこともできなかった。ただしよんぼりと指をくわえて見ているのみであった。

ある時、桑垣兵長が寒い朝作業に来て腹痛を起こし、隣の運賃精算所の庭に入れて軍医を呼び待っていたところ、伏原と小生は付き添いを命ぜられ番をしていた。その若いきれいな女事務員が俺と伏原に、お腹空くかとパンを少しくれた。満州ではどんな仕事をしていたか、兵隊になって何年か等尋ねてくれて、事務をしていたと話すと、こんな仕事はつらいだろうと同情してくれた。こうして血と涙の生活は続いた。

正月前になりようやく防寒具の服装をさせてもらい、震えながら仕事していたからほっとした。

正月は二日休みで、頭つきの魚一匹二食で寝て暮らした。

正月が終わり、今度は早馬さんの計らいで入浴場（エザクラポーン）に行くことになった。石炭を持ち帰り宿舎で炊くため（松田兵長の考え）、入

浴場はパーセント（作業）も良く、馬場さんの指揮で休憩も日中に二回。非常に良い作業場であったが、仕事は何をしてもきつかった。ボイラー炭台の炭上げ等本当にきつい仕事であった。入浴場に仕事に行った日、栗原伍長につまらぬことでどなられて腹が立ったが、後ほど彼も栄養失調になり頭を下げるようになった。

また夜勤で行き、皆持ち物を売りパンを買って食べた。入浴場はパンが買えるというので皆行きたがっていた。

警戒兵は品物を売買するので非常に取り締まりが厳重であった。ここでは早馬さん、富山氏が非常に幅を利かせていた。帰途、石炭をいっぱい担いで脚気にかかったような足でころがりながら帰ったあの坂道、遠い道、忘れられない。また夜勤で佐藤君と土工をやった時のあの寒さ。またマンホールからボイラーの温水暖房管の地下壕に入り、半日寝て監督に叱られたこと等忘れられぬ思い出である。

火夫のバーニヤン、機械のマダム等に非常な同情を寄せられたことも深い思い出である。スタレーカのマダムが一人非常に日本人の肩を持つてくれたことも。（ポーランド人）

そして四月、暖かくなるにつれて入浴場人員が不要になり加藤伍長等と一緒に五六官舎の作業に行くことになった。雪が降るのに石の整理、道具小屋、番小屋、板垣等造る。隣にアイスクリーム工場あり。宮地縮等も行きたくさん岩塩をもらってきた。鬼面という建設局の監督であった。この横にポーランド人との芸術家のたまりのようなものがあつた。馬場さん、相馬さん、杉山伍長も一緒であつた。ちようど特配のやかましく言われるようになった時にて一一〇パーセントを鬼面に書いてもらつてしばらく一〇〇グラムの特配を受けた。この横のアイスクリーム工場のボイラー室の火によく暖まりに行き、叱られたものである。一度ポーランド人のところへ昼食をしたところ、ここにはたくさん反古紙があり便所紙がなくて困

っていたので助かった。

十日ほどしてこの作業場もなくなり、五月近くなつた。そして入浴場に行っていた者はあそこ、こと別れてしまった。

四月一日から中隊に事務室を造つて下士官の古参連中が二、三人来た。小生も有吉准尉の当番仕事をさせられた。有吉さんの伝令要員として同じ事務室に寝たが、住吉も一緒に、軍隊の再編成のような事で随分苦勞の連続であつた。有吉さんより住吉の方が小生を自分の小使いのようにむちやくちやに使い、大変不愉快であつた。彼の当番吉田は恐れて痔が悪いと理由をつけてやめてしまつたが、自分はやめることができず、小原が交替で来て、彼と二人で彼等の面倒を見ることになつた。

作業割の下士官住吉の意により、深谷軍曹がその仕事をする事になつた。彼もなかなか男氣のある人間で苦勞した。堀田兵長、花房伍長等も一緒だつた。そして事務室の厳格なる生活は続いた。五六官舎から今度は製材所に行った。小原と二

て往生したこと、また運転手のマダムがかわいそうと思つたのか皆にパンを少しずつくれたこと、非常に印象に残っている。

後に戻つてしまつたがこのKYでは浜野(左官)の手伝いや中村の手伝い等をして少しの間でペーチペヤチに行き、一番初めに踏切のところの引き込み線の修理をした。それから毎日駅の方に行き枕木の取り替え、あるいは炭殻の貨車積み等色々やつた。またKYに行き今度は山に伐採に行った。三時間ほどトラックに乗り山に着く頃は十時過ぎであつた。ちよつと仕事をして昼になり、すぐ仕事にかかり三時頃に終わり、帰り始める。全く多忙な仕事のやり方であつた。

白樺林一望千里である。ところどころに麦畑もある。また途中の部落には牛の子がたくさんいた。部落と部落の間は門戸があつて番人がいた。ある時は自動車故障して歩いて遅く帰つたこともあつた。途中の草原の花、また牛、牛の群、何とも言えぬ景色。抑留を忘れて見とれていたひと時も

人で薪割等した。まだ時々小雪が降つた。五月一日のメーデーを目前に控えて職場の清掃に大わらわであつた。昨年来たこの製材所も今はすっかり原木も少なくなり、日本人の汗、酷寒とたたかった跡が偲ばれた。メーデーを控えて栄養週間に入り、ラーゲルに昼食を運搬してくるようになり、製材所は一番最後になり分配が遅れた作業場であつた。

一カ月も行かず、KY自動車の燃料試験をするようなところのガレージの新設作業に行つた。もうこの頃ではアカザ、タンポポ、ゴボウ等の野草が芽を出し、皆このKYの作業場を希望していたのである。

この前十日ほどデンドアーに行つて疲労して一週間ほど練兵休で休み、三月末にも脚気で十日ほど入院して、入院中央倉庫に食糧受領の使役に行つてかぢかぢの手で砂糖のこぼれたのを拾つてなめて甘かつたことが忘れられない。帰り、寒いのに運転手が道に車を放つたまま家に帰り、寒く

あつた。

すぐ伐採はなくなり、またペーチペヤチに行き、駅構内の枕木取り替え等をした。

八月頃になり、朝鮮からの抑留者が西に行き、我々の交替が来た、我々が帰れるぞなどと喜んだこともある。またソ連軍の抗戦兵士たちの帰還は毎月のごとくにぎやかであり、我々には淋しいことであつた。ロスケの兵隊より、一年たつたら帰れるとかあるいはウラルで銃殺されるとか、作業中に色々なことを聞き泣いたこともある。この年六月頃、山の伐採より一個中隊日本に帰ると一緒になつた部隊あり。喜んだところ、それは嘘で、片山隊長転属(第五分所) H大尉大隊長、金子少尉副官になつた。H大尉、ロスケの点数取りにて人気丸落ち。

八月より山より来た四中隊主力でスタンチャ、ミニナに有川中尉指揮で作業始まる。水路工事、たいいていペーチペヤチと交替で水路にも行く。収容所下の踏切で汽車に乗り約一時間半、マンホー

ル工事、山に穴を掘り木管を埋め冬の川の氷の下を流れる水の減るのを防ぐために、ミナ駅の下からミナ駅給水塔に取る水を守るための工事が十一月頃まであり。寒くなって生木はなかなか燃えず、泣くようになった。暖かい間は田舎なので子どもが馬鈴薯やいろいろの野菜を持ってきたり川でどじょうをすくったりして周囲の垣はなく楽しかった。十一月工事終了、最後には貨車での往復のため凍傷にかかる者もできて大変だった。

十一月頃より建設局に（ペーチペヤチなくなり）行く。Mがりがり少尉の指揮でやかましくて往生したが、間もなくけがをして入院。有川中尉指揮となる。最初は土工で苦労したが、戦友藤原君、佐藤、三谷各氏の取り計らいで鉄筋の作業にまわり、加藤伍長も一緒に鉄筋伸ばしをやる。なかなかこの仕事もつらかった。

この冬より級食となり、建設局は全員四級食、ペーチペヤチは二級一級で、我々は住吉から相当な言葉を受け、死ねと言わんばかりであった。残

軍曹の計らいにて託児所の仕上げ作業に二日ほど行き、また建設局に行く。

藤井曹長託児所で名を上げ、マッセル指名で建設局に回ってきた将校も四月から全部藤井の指揮下に入り、有川中尉、加来さんたちも全部作業するようになった。

二月末退院、四月上旬ダモイがありもう少し退院が遅かったら帰れたが残念ながら駄目であった。二月、日本人抑留者の帰還の発表あり。今年こそは確実に帰れるものと安心して毎日作業に通った。三、四、五月と非常な馬力で建設局の工事が進められ、ロスケの労働者もたくさん入って来て、鉄筋の結束も次から次と始まり多忙を極めた。

第七收容所四月全員帰国を聞いて。加来さんペーチペヤチから帰り、第八もいよいよ帰ると所長の講演あり。飛び上がって喜んだ。まず病人を一番先に、その次は作業成績の良いところからと訓辞した。そして四月中頃第七と一緒に病人が帰るいいよいよ淋しくなった。

念だったが泣いて我慢した。そうして第二回の正月は来た。正月だけは級食を廃止してたくさんのご馳走を作り、三日休みで前後の日曜日に勤務した。今年も冬を越すのかと思つてぞっとした。水路で帰り、汽車の中白樺の紅葉の落ちるのを見てなんと淋しかったことか。案ずるより産むが易しで、正月も過ぎ二月が来た。鉄筋も少なくなり藤原氏と二、三人になった。古鉄筋を集めて仕事をしていたところ、二階から鉄筋の束を投げたとき、外套の袖に曲がった鉄筋がひっかかり下に引きずり落とされ死んだと思つた。頭と腰を打って動けなくなり、馬橋に乗って收容所に帰る（二月八日）帰る途中気がついて死を逃れた。

帰ったら星子軍医、渡辺軍医殿が、死ななくて良かった、山根もう今年は帰ると言っているとの話で非常に喜んだ。

二十日ほど入院したが星子軍医の取り計らいで中隊の練兵休室に帰されすぐ作業に出された。打ち身になりしばらく力仕事ができなかった。深谷

この頃より石田氏（満州共和会出身）民主運動の指導者となり、民主運動ようやく盛んになる。

そして五、六、七、八月と待ちつつ作業したが一向に我々の帰る日來たらず。冬の訪れを悲しく予想するのであった。一九五〇年までとかあるいは道路建設局工事完了するまでとか色々悪い噂が飛んだが、噂のごとく悪い方に事は転じて寒い冬を越したのであった。

工事もどんどん進捗し、冬は幸いに部屋の中の仕事をすることができた。鉄筋屋の仕事も終わり、ペンキ塗りの仕事もして半分は終わった。時折屋上の炭殻運搬等も加来さんと一緒にしたこともあった。かくしてクラスノヤルスク鉄道局の工事もほとんど完成に近づいていた。そして第三回目の正月が来た。本年も三日ほど休む。九月第二次病人のダモイがあった。石田氏が作業成績は他の收容所に負けておらぬのに、これでは皆パンを売り、煙草を吸って、栄養失調となり帰国するより手がないと言っていると抗議したところ、十二月のノ

ーシベルスク地区転属に参加、住吉、相馬班長、堀田、友実の朋友も一緒に転属す。

一月十八日よいよ人員少なきため第五收容所と合併になり、酷寒の最中転属す。大きなバラックに中隊全員收容される。この部屋の主力は海拉爾の部隊であった。

クラスノヤルスクに到着の特別れた五、六中隊の諸氏とも若干再会できた。特に佳木斯検車区青木助役（少尉）と会いうれしかった。一カ月ほどして盲腸のため川向こうの第四收容所に入院されたが、手遅れにて亡くなられたことは大変残念であった。

佳木斯満鉄病院にいた井比藤威さんも一緒に入院した。

（正月前堀中尉殿指揮で五、六人で印刷工場に一カ月ほど雑役作業に行ったこと書き落とす）

今度の作業場は嶋本の計らいで高橋司典とともにテンドアー（機関車積み用貯炭場）要員で行く。第五バラックに替わり笠井軍曹の指揮にて行く。

とのことで作業に出たが、腹痛だけでなく、頭がふらつき立っていられないので、村山少尉殿の計らいで焚き火辺りで晩まで寝て、收容所に帰ってから渡辺軍医殿の診断を受け、盲腸とわかり、夜中ロスケの看護婦の検温で三八度以上の熱が出て、翌日入院、すぐに手術を受け十二日間入院し、全快して帰る。帰ってからは外の仕事には出ず、気の変になった見習い士官の番をさせられて過ごす。六月十八日頃ダモイのためナホトカに向かつて出発。十一昼夜汽車（貨車）に揺られてナホトカに到着、民主運動の仕上げ訓練に参加、いざ帰国となったところ、ロシア語のアベベの終わりやでヤのつく名前の中隊は後回しということになり、一カ月ほどナホトカの收容所の掃除、清掃をやらされ、八月九日頃遠州丸に乗船でき、八月十二日舞鶴に上陸。八月十五日故郷の実家に帰ることができました。

ナホトカ滞在中、将校梯団の到着あり。部隊長の西村大佐殿に会うこともできました。

一カ月行つて石炭積み（トロッコ）貨車卸し等やったが、体がきつくて村山少尉の計らいで元の收容所の改造作業に行く。昨年の革命記念日（十一月三日）より自動車にて往復。ここは作業も楽だし、馬鈴薯も若干手に入り良し。藤井や嶋本は当收容所に来てから投書のため第三收容所に転属となる。当收容所は民主運動が盛んですべて抑留生活が有利であった。嶋本転属の後は村山少尉作業係となる。

佐野上等兵（東京出身）、大工の本職であったので幅十メートル、長さ二十メートルくらいの倉庫の建築工事に行くようになり、梁張りから水盛の段取りをしたところ、ロスケの監督が驚き佐野技師、佐野技師と言つて大変喜んで愉快であった。我々は百メートルほど横から煉瓦を一輪車で運搬した。

その二、三日後朝腹痛を起こし診断に行つたところ、高等商業出の衛生軍曹の診断で、腹痛だから何か変な物でも食べたのであるう、作業に行けば、終わりといえます。

在ソ三年間色々とお世話になった上司の方々、戦友の方々に衷心より深甚なる感謝を申し上げ、亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。